

【講演記録】

日本における儒教

―その発展過程と特徴―

牧角 悦子

本稿は、二〇一五年三月二十八日、ベトナムのハノイ国家大学社会科学人文大学・中国研究センターで開催された「東亜儒学・伝統と現代的考察」をテーマとする東亜儒学国際研討会議での報告（中文）を、日本語に直し修正を加えたものである。会議では欧米・中国・韓国・日本の研究者が、各国における儒教の受容や展開とその特徴について報告した。従って本稿は、日本における儒教の受容と展開の特徴を概論したものとなっている。

はじめに

東アジア文化圏は古くから中華帝国を宗主と仰ぎ、その漢字文化・儒教文化を先進的文明として積極的に受け入れてきた。中でも日本は文明の初期より江戸の末期に至るまで、大きな憧憬と純粋な尊敬を以てその時々中華文化を旺盛に吸収し、柔軟に日本の文化に適応させてきた。本稿では、日本におけるこのような中華文明の受容の中で、特に儒教というものが如何様に受け止められて来たのか、それを歴史的に概観すると同時に、日本における儒教の独自の展開の例を幾つか具体的に示したい。その一つは江戸初期の三名君の一人と仰がれる岡山藩の池田光政の建てた閑谷学校に見られる儒教理念の実践、もう一つは江戸の論語解釈の優れた成果として知られる亀井南冥の『論語語由』にみられる独特の学術性である。そこ

には儒教の持つ多面性の日本的展開があると同時に、儒教的理念の高度に純化された形が垣間見られるからだ。

明治維新から百年が過ぎ、近代文明もまた相対化されようとする昨今の日本において、しかし反対に前近代的、言い換えると朱子学的価値観が、日本人の精神性の中に濃厚に残存し続けていることについても最後に触れたい。

### 一、日本における中国文化及び儒教の受容<sup>1)</sup>

#### 平安以前（一七九四年）

日本と中国の初期の接触として知られるのは、一七八四年に九州の志賀島で発見された金印に「漢委奴国王」の刻字があり、それが後漢光武帝期（『後漢書』光武帝中元二年（五十七）年に倭使に印綬をたまわったとの記事あり）の物とされることである。この金印については真偽両説がいまだに紛々としているが、本物であれば後漢の時代に既に日中両国が国レベルで交流をもっていた証になる。

次に文献に登場するのは、『魏書』倭人伝（東夷伝倭人項）にみえる「卑弥呼」である。『魏書』の東夷伝には、大和（倭）の国に「卑弥呼」という女王がいて巫による政治を行っていることが記される。

この当時、日本は中国の事を「漢」と呼んでおり、以後日本においては中華文化一般に対して「漢」の呼称を附する。「漢字」・「漢文」・「漢学」・「漢人」などがそれである。

書籍の将来についていえば、応神天皇十六年（二八五）に王仁が「論語十卷」「千字文一卷」を献上した、と『古事記』『日本書紀』に言う。この当時は朝鮮半島の百済を通じた中国文化の輸入の時期であり、三韓から書籍や中華文化のみならず五経博士が来朝した。当時の日本における中華文化の受容は主に朝鮮からの渡来人や帰化人の手に帰していた。

継体天皇十六年（五三二）には仏教が伝来する。以後、日本の政治文化は仏教の影響を強く受けて展開する。欽明天皇（在

位五三九―五七二)のころになると、百済から釈迦仏金銅像や律師・禪師・比丘尼・仏師が渡来、彼らを通じて中国の知識が増す。この頃までは、日本が中華文化を渡来人經由で受容していた時期といえる。

推古朝(五九三―六二八)になると、上記の間接的な中華との交渉は直接交渉に変化する。遣隋使・遣唐使の派遣である。推古天皇十五年(六〇七)に小野妹子を第一次遣隋使として派遣して以後、奈良朝に入っても遣唐使として継続、多くの貴族(大伴氏・藤原氏)・学問僧・留学生が相互に行き来した。唐僧鑑真の来日もこの頃(七五四年)の出来事である。

書籍の影響で言えば、聖徳太子「憲法十七条」には『詩経』『書経』『孝経』『論語』『左伝』『礼記』の他『管子』『孟子』『墨子』『荘子』『韓非子』、更には『文選』からの引用があり、また『日本書記』は荀悦『漢紀』を襲う。日本における「文」の初めは中華文化の全面的な受容から始まったのである。

#### 平安時代(七九四―一一八五)

菅原道真・僧空海を出した平安期は、唐との直接交流の中で日本の漢学の水準が急速に高まった時期である。この時期の漢学の担い手は仏僧と貴族(大江氏・橘氏・源氏・菅原氏・清原氏)が中心であった。大学寮での教育には大経として『礼記』『左伝』、中経として『毛詩』『周礼』『儀礼』、小経として『周易』『尚書』を修めた。文章においては『文選』『白氏文集』が権威であった。貢擧の制度としては秀才・明経・進士があり、また釈奠も行われた。この時期、漢籍は音読と和音による所謂訓読が始まった。奈良朝までは呉音、奈良朝の末期には漢音による唐文化受容に転換する。

#### 鎌倉時代(一一九二―一三三三)

平安末期から宋との交易が徐々に盛んになり、鎌倉時代になると仏僧が独占して宋との交渉を持った。栄済の臨済宗、道元の曹洞宗の持ち帰りもこの時期のことである。

宋との交流は經典解釈にも転換をもたらし、清原氏・菅原氏・藤原氏の貴族たちが秘説の伝授に終始したのに対し、入宋した僧侶たちはいち早く宋学を取り入れ、仏教との関わりも手伝って、宋学は一層浸透していった。

宋学の新注の研究は後醍醐天皇・花園上皇の殿上において行われた。後醍醐天皇はまた『文選』ではなく『韓昌黎集』を重視、史書においても『史記』『漢書』ではなく『資治通鑑』を重んじた。これは日本の学問が中国における漢唐訓詁学から宋明理学に変換していく転換点として注目される。

これまで、貴族・仏僧という一部インテリの独占していた中国文化・儒教文化が新しい展開をみるのが次の江戸時代である。

## 二、江戸時代と儒教（一六〇三—一八六八）

江戸時代の初期は、政治理念としての儒教が提唱された時期である。藤原惺窩の教えを継ぐ林羅山は徳川家康から三代にわたって政策顧問となり、儒教の啓蒙期の学者として大きな力を持った。同じく江戸の初期には中江藤樹・熊沢蕃山といった陽明学者、神道を取り入れた国体学を提唱した山崎闇斎など、程朱学からの脱皮を試みる方向も生まれる。その中で、伊藤仁斎こそ、最も注目すべき儒者である。仁斎は朱子学に対して批判的態度をとり、解釈における恣意性を排した史学者的批判精神を特徴とする。清朝考証学とも共通するその古典学は、近代的視点からも評価が高い。仁斎に遅れること四〇年、江戸の中期に現われたのが荻生徂徠である。仁斎と同じく程朱学を否定し、古文辞の研究によって復古学を提唱した徂徠は、唐音の直読を提唱するほど中国語にも優れ、新しい古典学を展開した。『論語徴』を代表とするその先進的解釈学は、劉宝楠の『論語正義』に引用されるほど中国においても高い評価を得ていた。

江戸時代の中期は、「寛政異学の禁」と朱子学による思想統一の時期である。寛政異学の禁は、幕府による思想統制とし

て批判的な見方が主流であった。確かに、経済力をつけ始めた民間（商人・町人）や、窮乏した農民の中からは、統治思想としての朱子学以外の思想が生まれ、それが政治批判に発展し体制を揺るがせることもあり（陽明学を学んだ大塩平八郎の乱・農民の一揆等）、それらの封じ込めの意味をこの禁令が持っていたことは間違いない。しかし別の視点から見れば、学問の一本化と学問の奨励とによって、各藩においては藩鬻、一般民衆においては寺子屋などにおいて、統治階級としての武士のみならず、町人・農民にまで教育が行き届いたこと、その中で朱子学的修身（『論語』の学習を通じて、忠孝を中心とした道徳理念や清廉の思想を身に付ける）意識が深く浸透したことは、日本における精神史を考える上で極めて重要だと考える。

江戸時代の後期になると、諸学派が並立し訓詁が成熟する。儒教の持つ学問的側面はこの時期大きな深まりを見せ、徂徠や仁斎の影響を強く受けた学派が成長する。幕藩体制と強く結びついた統治者層の政治理念としての朱子学、學術の純粋性をより重視する古文辞派、その双方を取り込む折衷派、この三派の學術思想が江戸後期の特徴となる。また、陽明学の持つ実践重視の思想は、尊王攘夷思想と結び付いて日本独特の展開を見せる。

### 三、近代と儒教

近代は前近代的なものの否定の上に成り立つと考えられがちである。日本における文明開化は自由と権利、そして科学技術の導入に代表され、中国においても民国初期の新文化運動では民主と科学が叫ばれた。そしてその際、儒教的価値は「封建的」というレッテルを貼られ、否定の対象となったのは事実である。しかし日本人の精神性を深いところで支えてきた儒教、特に朱子学的志向は、近代になっても衰えるどころか、反対に西洋近代思想の受容と近代的国家経営と制度形成において強力な地盤となったことは強調されてよい。幕藩時代からの士族（武士階層）が新しい国体とそれを支える理論・理念を

様々に模索する中で、或る者はドイツ的立憲君主制をめざし、或る者はイギリス的議會制政治を掲げ、また或る者は天皇を中心とする国体確立を主張した。天皇制を中核に据えるには、儒教の忠孝と修身とが有効に働き、民族意識の強調の為には「国学（日本の国学）」が重要であり、議會制・立憲政治の確立には洋学（西洋の学問）の自由・民権・平等思想が前提となる。日本の近代は儒教と国学と洋学とのせめぎあいの時期であり、しかしそのいずれもが漢学的教養を背景に持っていたことが特徴である。

「漢学」と呼ばれる中国古典への造詣は、明治から大正期にいたるまで、知識人の基礎教養であった。また「修身」と「忠孝」とは近代の社会倫理においても確固とした価値として存在し続けた（それは昭和においても然り。またあるいは現代においても多少薄れつつも続いているといえるかもしれない）。日本の近代化をスムーズに導いたのは、幕末明治の志士たちが、一様に高い教養と精神性を、漢学によって身に付けていたからに他ならないのだ。

#### 四、現代の漢学・儒教

その漢学、中でも儒教の存在は、新しい教育制度の確立とともに学問の一分野に収斂されていき、あるいは中国学として歴史・文学・思想研究の対象となり、あるいは哲学・倫理学として、あるいは社会思想史として、様々な視角から捉えなおされることになる。

現在の状況について言えば、半世紀前の日本の学術分類において中国学は、中国文学・中国哲学が相関的にとらえられていたが、現在の学術分類では、中国哲学は哲学の分野に、中国文学は各国文学の更に支部、かなり細部の学術領域になってしまい、研究人口も激減、大学における「中国文学科」の存在は危機的状况にあるのが現状である。中国哲学、或いは東洋史の一分野である中国歴史学もまた同様であり、中国学全般はいまや存亡の危機にある。斯くまでも日本人の精神性の中核

にあった漢学・あるいは儒教の存在が、このような状況にあることを憂うる我々中国学研究者は、あらゆる努力を惜しまず斯学の宣揚に努めている。本学における日本漢文学をテーマに掲げた様々なプロジェクト、そして本誌『日本漢文学研究』の発刊もまたその一環である。

ただ、学問としては危機に瀕している漢学・儒教は、しかし日本人のDNAの深いところに組み込まれ、それなりの社会的教育を受けた日本人であればだれもが持つ一種の潔癖として、いまだに残っている。このことについては最後に述べる。

## 五、儒教の持つ多面性とその日本的展開

一口に儒教と言っても、それは多様な側面を持つ。まず古典中国においてそれは、天の思想を背景とする王朝統治理論として存在価値を高めた。また、宋学（朱子学）においては精神・人格の陶冶と倫理道徳観の提示という展開を持つ。国家思想から個人の精神論へ変化したのが宋学の最大の特徴であろう。また、儒教は理念の追求という学問と、その継承の為の教育を重んじる。儒者は自身の儒教の実践と同時に、それを伝え教えることに大きな情熱を注ぐ。また、儒教の持つもう一つの側面として、感性の練磨がある。正邪を見分ける正しい鑑識眼・品隲眼の養成、礼楽の実践に必要な、自らの表現としての詩文の創作は、儒者の教養として貴ばれた。

このような儒教のもつ多様な側面の中の幾つかの要素を、極度に純化した形で示す二つの例を次に挙げてみたい。一つは池田光政の閑谷学校、いま一つは亀井南冥の『論語語由』である。

### (一) 池田光政と閑谷学校

昨年三月、岡山県興讓館高校において開催された「近代における東アジアの漢学の展開」をテーマとした国際シンポジウ

ムの終了後、関連する史跡探索として閑谷学校を訪れた。一度は訪れてみたいと長年思っていた閑谷学校は、予想通り森閑とした山懐に抱かれて、荘厳な空気を凝縮した空間に静かに佇んでいた。それは正しく閑かな谷の学校であった。

閑谷学校は、江戸時代の初期に岡山藩主の池田光政が創設した学校である。<sup>2)</sup>光政は藩士の為に岡山藩学校を設けたほか、領民の為に藩領の諸郡に一二三か所の手習所を作った。教育に熱心な領主であったのだ。しかし理想と現実とは齟齬を来たし、飢饉や財政の逼迫により学校経営は破綻した。光政はしかしこの閑谷学校をあくまでも守り抜き、後に孔子廟を並置し、死後は自身の廟を「芳烈祠」として併設し、ある種のモニュメントとしてその存在を現在に至らしめた。

池田光政は江戸初期の三名君の一人に数えられる。三名君とは、水戸藩主の徳川光圀・会津藩主の保科正行、そして岡山藩主の池田光政である。徳川幕府が儒教の理想である封建を体制として定着させるべく、その統治を展開し始めた極めて初期の段階で、儒教的理念をその封地（藩）において実践しようとした藩主たちである。武力統治から徳治へという政治転換の中で、儒教による領民の教化を目指した光政の理想は高かったが、しかし現実的にはそれは高すぎる理想であった。領民のみならず、家臣ですら光政の教育への意志、閑谷学校の意義を理解する者は少なかった。その意味で閑谷学校は、庶民教育の為の学校というよりは、光政の儒教理念実践の象徴として存在する。

閑谷学校に具現されたもの、そこにはまず宗教性がある。聖廟には大成殿・東階・西階・中庭・外門・文庫・厨屋があり、大成殿には中央の朱塗りの厨子の中に黄金の孔子像が祭られ、春秋に積業（犠牲ではなく菜を備える積奠の簡略形）が行われる。孔子像は当時の儒者の入念な考証に基づいて鑄造された。因みに、同時期に明国から日本に亡命した朱舜水は、三体の孔子像を日本に将来した。<sup>3)</sup>朱舜水は水戸の徳川光圀の顧問的存在として、江戸初期の日本の儒教受容に大きな役割を果たした。<sup>4)</sup>孔子像と文廟という儒教の持つ宗教性が、朱子学が統治思想として貴ばれる寛政以前にあっては重要な要素と認識されていたことが理解できる。

次に、儒教が理想とした周代の制度の忠実な再現がある。学校は鶴鳴門を正面として石墻で囲まれ、一つの異境を形成す



る。鶴鳴門の外には泮池と呼ばれる池がある。「泮」とは「泮宮」、すなわち諸侯の学校を意味する。天子の大学は辟廱、諸侯の学宮は泮宮（『詩経』魯頌「泮水」の毛伝・鄭箋および『白虎通』）という周代の制度を忠実に再現しているのである。また光政は、井田の法を実践した。周代の法を模して、公私の田を分けて盧舎を作ったのである。最初は海浜にあった井田を宝永七年に閑谷学校の学校田に加えたのは、やはりこの地が儒教理念の実践の中心地であったからであろう。「封建」・「井田」・「大学」という儒教が理想とした周代の制度（それは中国において実践しようとして実践できなかった制度なのだが）を、光政は封建された岡山で、諸侯（藩主）として実践しようとしたのである。

文廟・芳烈祠に見守られる形で、学校の中心にある講堂は、入母屋造りの壮観な建物である。儒教の精神性と日本の美意識とが融合した非常に格調高くまた美しい建物である。十数メートル四方の講堂には「克明德」と書かれた額、朱子の「朱文公学規」、池田綱政の書名のある「定（就学規則）」の他、何の装飾もない。ここでは月はじめの朱子「白鹿洞揭示」の講釈からはじまり、『孝経』『小学』『四書』『五経』、そして『左伝』『国語』『史記』『漢書』と素読を進め、「専ら孝悌忠信の道を着実に講究致させ、実行を本として、俊秀のものは其の余力を以て博文に導き、詩章にも及ぼさしむ」という課業が定められていた。

講堂の後ろには学房という寄宿舎があり、また初期には学校領（田地・山林）を設置して収入の確保を図ったという。

このように閑谷学校は、池田光政の高い理想から生まれた、一つの儒教理念の実践であった。理念の実践は実際の経営とは次元が異なる行為である。町から遠く離れた交通の不便な山奥の学校は、現実的な経営としては決して成功したとは言えない。しかしこの特別な空間の醸し出す荘厳な雰囲気に触れた者は誰でも、純化された精神性の持つ形の美しさに圧倒されるであろう。経営的に破綻していたこの学校が、時々復興され、儒者や文人の憧憬となり、現在に至るまで存続し続けたこと、それは理念は現実とは異質の次元で価値を持つことを我々に教える。儒教の、理念としての存在の意味を、閑谷学校は見事に具現しているのだ。

## (二) 『論語』 解釈と漢詩文

光政の閑谷学校が儒教理念の日本的展開だとすれば、江戸期の『論語』の解釈には別の日本的展開が見られる。それは、前近代的学術性とも呼ぶべき独自の古典アプローチである。

仁斎と徂徠の学問については先に触れたが、彼らの特徴はまず一つ目に朱子学的（精神論的）解釈及び仏教的（唯心論的）解釈に対する批判がある。それを受けて二つ目に古典本来の意味を問おうとする態度がある。さらに優れた言語感覚もその共通する特徴である。仁斎は古義派、徂徠は古文辞派と呼ばれるが、彼らは一様に古典解釈に実証性を求めた。

寛保三年（一七四三年）福岡藩に生まれた亀井南冥もまた、『論語』の解釈に実証性を求めた。彼の著書『論語語由』の特徴は、その書名が示す通りである。『論語』を語りの場から生まれたものと見て、その背景を重視する解釈、つまり「語」の「由来」を述べるものなのである。

「語」の生まれた「場」の再現の為に必要なのは、古代言語の正しい理解とともに、文脈の正しい把握であろう。それがどういう状況における発言なのか、重いか軽いか、冗談なのか真面目なのかを、文の流れから読み取る。そのために必要なのは優れた言語感覚、感性の鋭敏さである。

該書の凡例の中から、場面によって発言の在り様が変化することを示した部分を引くと以下の通りである。

專語古而意在傷時者 古の事を語りながら現在を批判するもの

全語今而意在慕古者 今を語りながら古への懐古が主旨であるもの

語意似深而實淺者 深い事を語っているようで実は卑近な事を言っているもの

語氣輕淡而意至重者 軽い語り口だけれども内容は至って重いもの

陽語甲而陰戒乙者 表向きは甲を語りつつ、暗に乙を戒めているもの

語在於此而意隱於彼者 表面上の言葉の裏に別の真意が隠れているもの

遜言而寓教者 謙遜の言葉の中に教えを寓しているもの

明言以示實者 はっきりと具体的に示すもの

冷語似戯者 冗談、からかい、ブラックユーモア

託言不露正意者 喩えによって語り真相を明示しないもの

『論語語由』には、経書を主観的に自説に取り込む恣意性を排した、実証的「読み」を重視する態度が見られる。朱子学的精神論の純粹な信奉から、儒教の客観的実証へと学問が変化しているのだ。しかし実証的とはいっても、孔子に対する尊崇はあくまでも揺るがず、また「忠孝」という価値観から逸脱することは決してない。儒教倫理を堅持しながらも、解釈に合理性を求めようとする態度、それは前近代と近代（合理と非合理・西欧的価値と東アジア的価値）の同居とも言える独特の経書解釈である。

また、仁斎・徂徠・南冥はともに学問の実効性を重視する。机上の空論よりも、実際の生活に生きて働く思想を重視したので。これは仁斎が市井の学者であったこと、南冥が儒医であったこととも関連しよう。生きるか死ぬかの患者を目の前にして、実効性よりも理念を重んじる医者はいないからだ。統治政策とは距離をおいた市井の学問の中に、近代性が芽生えていたということもできよう。

また、江戸期を通して、儒者の評判を高めたのは詩文の才能であった。優れた詩、優れた文を書ける人材は、まず何をおいても尊敬された。人格破綻者の要素の強かった頼山陽が然り、そして南冥の文名を全国に轟かせたのが、朝鮮通信使を前に披露した漢詩であったこともその一例である。「文」を尊重し、優れた文才を評価することは、発想と感性の重視を前面に出す江戸期の学問とも共通する。

そして江戸期は武士の時代であったが故に、清貧が強く志向された。衣食住すべてにわたって質素であること、儉約であることが大きな美德とされた。清貧は漢代儒学や宋学的精神論の一つの特徴である。物質的価値の享受より精神性を重視する傾向は、近年まで続く日本人の生活感情として確実に存在する。経済ばかりが強く叫ばれる昨今の状況に、違和感を持っているのは筆者ひとりではあるまい。

このように、江戸期の学問には儒教的理念の最高に純化された形が間々垣間見られるのだ。

## 六、おわりに

明治維新から一〇〇年が過ぎ、近代文明もまた相対化されようとする昨今の日本において、しかし反対に前近代的、言い換えると朱子学的価値観が、日本人の精神性の中には濃厚に残存し続けている。最後に、日本人の感性の中に残る儒教の価値観について述べよう。

例えば我々日本人は、電車の中で化粧をする女性に対して、説明しがたい不快感を覚える。電車の中で化粧をしても、別に周りに被害を与えるわけではない。朝の忙しい女性にとって通勤中に電車で化粧できれば、それは自宅でするよりも時間の節約になる。合理的に考えれば何の不都合もないその行為に対して、多くの大人は不快感を持つのである。なぜなら、それは身だしなみを整えるという家の中でするべき所作を公共の場に持ち込むという、礼儀に反する行為だからである。礼儀作法という洗練された文明の形に対して、日本人は感性的な美意識を体得しているのだ。「みつともない」「だらしない」「はしたない」という語彙は、このような日本人特有の感性から生まれた言葉である。

また、日本人は時間や注意書きは必ず守らなければならないということを、感覚的にあるいは潔癖症のように持っている。それは、礼儀作法は理屈抜きで守らなければならないという感覚が徹底的に染み込んでいるからである。朱子学が、

「礼」という規範の遵守という形で一般民衆の生活レベルまで浸透し、現在に至るまで生き続けている、ということがこの二つの事例からもわかるだろう。近代、そして現代の日本人の精神を考えるに際しては、このように江戸中・後期の学問、朱子学の徹底的な浸透というものを理解しない訳にはいかない。それは西洋近代の「合理」あるいは「理性」という観念とは異質の、儒教的感性なのではないかと筆者は考える。

日本における儒教は、始めは教養人の、あるいは貴族・官僚層という支配者側の教養であり理念であったが、江戸の中・後期に至ると、一般民衆にまで浸透し、修身・齐家という理念だけでなく、規範の遵守や清貧の尊重という生活感覚にまでひろく日本的感性を養った。このことは、儒教のアジア的展開の一例として注目されてよいのではないかと筆者は思う。

注

- (1) 本章は主に倉石武四郎講義『本邦における支那学の発展』（汲古書院 二〇〇七年）に基づいて叙述する。
- (2) 閑谷学校に関する資料としては、備前市発行の『学びの原郷 閑谷学校』報告書』（備前市教育委員会生涯学習課編集 平成二十七年）がある。
- (3) 朱舜水と三体の孔子像については、銭明「朱舜水の主動的在地化と受動的日本化―日本における朱舜水の遺物・遺像から―」（ペリカン社『日本思想史』八一 二〇一四年）参照。
- (4) 朱舜水と水戸光圀の学問・思想については、徐興慶「『西山隠士』七十年の歲月―徳川光圀の学問・思想形成およびその文化遺産―」（ペリカン社『日本思想史』八一 二〇一四年）等に詳しい。
- (5) 閑谷学校が池田家の墓陵と城内の中間地点にあることの意味については別途考察する必要があると考える。